

柏樹子（はくじゅし）

令和2年5月第1週放送

「柏樹子」とはヒノキ科の常^{じょうりよくしんようじゅかしわ}緑針葉樹 柏 コノテガシワの事です。

中国が原産で、寺院の庭先に植えられていました。身近な存在だったからでしょうか、代表的な禅問答^{ぜんもんどう}の題材としても取り上げられています。

中国の唐の時代に活躍した趙州^{じょうしゅうぜんじ}禅師に対してある僧侶が、「達磨大師^{だるまだいし}がインドから中国にはるばるやって来た意味とは何ですか。」と尋ねたところ、「庭先の柏樹子だ。」だと答えました。するとその答えに納得のいかなかった僧侶が「私は禅の真髓について質問しているのです。外に見えるものでお答えにならないで下さい。」と返すと、趙州禅師からは「わしは外に見えるものについて答えているのではない。」との答え。そこで、この僧侶が今一度同じ質問「達磨大師がインドから中国にやって来た意味とは何ですか。」と尋ねると、趙州禅師は「庭先の柏樹子だ。」と全く同じ答えを返したそうです。

禅問答と言えは、訳の分からない、かみ合わない会話の事であるというイメージを定着させるのにこの問答は間違いなく一役買っています。実際、この問答についての解釈も一律ではなく、自己とそれ以外のものとの違いのない自他一如^{じたいちによ}の心境を言ったものであるとか、一見外にある対象である柏樹子を指しているようだが、それを見ているのは誰か、他ならぬ自分ではないのか、という事を間接的に気付かせようとしたのではないか、などという解釈がなされているようです。

このような考え方の延長線上にあって、道元禅師もこの有名な柏樹子の禅問答を『正法眼蔵^{しょうぼうげんぞう}』で取り上げ、自己と、仏様の性質つまり仏性^{ぶつしょう}との関係の問題として参究されています。心の働きのないとされている植物の柏樹子にも仏性はある。しかしその仏性とは私達の見ている柏樹子の中に宿っているようなものではなく、

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

柏樹子が柏樹子として絶え間なく生き続けている、まさにその所に現れ出てくるものであり、そのポイントをきちんと参究していかねばならない、と道元禅師はお示しになられています。

暑さ、寒さに強く、春になると小さな花を咲かせ実を結ぶ・・・、柏樹子の姿に自己の生き方を投影し、^{ぶつどう}仏道を絶え間なく実践していくことの大切さを見出しておられたのでしょ

— 終 —